



年頭所感

明けましておめでとうございます。

当協会の昨年的一年で画期的なことのひとつは、当協会が単独で「小田原文化の日俳句大会」を開催したことでした。会員及び理事の皆さんのご協力で、無事開催された上、その後約一か月間、県西部では、一日を除き、感染者ゼロが続き、開催の悪影響が回避されました。正に、県西部の魁として、うずくまっていた「丑」が立ち上がったのです。間もなく梅まつり、桜まつりと俳句大会が続きますが、干支の虎(寅)を怒らせまいよう、じっくりついてゆきましょう。

ふたつ目は、佃名誉会長の「俳句の岸辺」の刊行です。評判は上々で、私たちは自信をいただきました。

ともあれ、本年も皆様のご健康とご健吟を心から願って止みません。

令和四年 元旦

小田原俳句協会会長 池田 忠山

「俳句おだわら」10句抄(652号より)

池田 忠山 抄出

山里にモダンアートの案山子かな

赤飯の蒸し布乾く野菊晴

ていねいに解く箱書小望月

新薬の香り撒きたる脱穀機

貝がらを操るやうに望の潮

虫時雨寺に雑魚寝をせしことも

脹脛ゆつくり摩る良夜かな

文机を持たぬ半生草の花

コスモスや運搬車より馬の貌

餡パンの中の空洞いわし雲

佐々木重満 抄出

屁理屈を並べて秋刀魚食う男

切株の朽ちし腰かけ秋の風

どっちかと言えば嫌いや曼珠沙華

隠れ家は新薬詰まった納屋二階

天井の木目くつきり瀬祭忌

喜寿米寿白寿乾杯豊の秋

秋高し天文好きと地層好き

大仏の視線に応ふ秋思かな

捨案山子夜すがら星に語るらし

われは芋洗う渋谷スクランブル交差点

村上 龍山

豊田 幸枝

陌間みどり

野川木一路

伊藤はる子

佐宗 欣二

中田 笑子

中根 和子

米山 翠

竹下由里子

市川めぐみ

関戸わよこ

青木たけを

岡本 史郎

内田知江子

田中 恵一

瀬戸 りん

高橋 正子

横塚 昌平

大石 和子

鬼(ご)っ(い)

佃

悦夫

炎帝と嘯みあいながら寝屋に入る
炎帝が神経系統司る

稲妻に負けまいとして食らいつく
山百合の破天荒に滾るらむ

黄揚羽と余命の振子鳴りてけり
苺に翅そもミステリーサークル内

かあさんが燕子花に乗ってきたよ
鬼ごっこ天狼星に体当り

初夢

池田

忠山

鳳凰の翼びらきに初日の出

初夢の虎の尾を踏むところまで
目はすでに的を射抜きて弓始

白息もつなぐ駅伝中継所

さつきから松にかかれる羽子ひとつ
いくたびも鏡の前へ春着の子

場所入りの鬘に触れんと団子花
果ててまだ空はみづいろ出初式

■11月号(652号)「競詠10句」より5句(1)

五句雑感

瀬戸 正洋

夕さりの鶏頭歩き出す気配

加藤かほる

歩き出したかった。一步踏み出せば何もかもが変る
と思った。鶏頭も耐えていた。鶏頭には心に秘めた何
かがあったのである。そんなことなど曖にも出さずに
黙って咲いていた。しかたがないと諦めていた。夕さ
りとは、昼と夜とが入れ替わる頃、決断するには相応
しい時なのである。

朧夜や捉えどころのなき量子

佐々木重満

朧夜とは朧月の出ている夜のことをいう。朧とはも
の姿がかすんではつきりしない様をいう。量子とは
粒子でも波でもない。宇宙はすべて量子でできている。
人とはとらえどころのないものなのかも知れない。朧
夜である。海も山も都市も人も何もかもが包み込まれ
ている。朧と量子とは相反するものである。

思いがけぬ所へ飛び火吾亦紅

竹下由里子

考え通りに物事を進めることは難しい。万全の注意
を払っても思わぬところに綻びが出てしまう。飛び火

深呼吸

新井たか志

南へ飛機の消えゆく去年今年
声にして朝を満たす初日かな
初富士や大事にしたる深呼吸
御札の濃ゆき輪飾白に有り
文鎮の咆哮の虎や筆始
胸厚き仁王崇めり初詣
初参り本堂抜くる僧の喝
鉾杉に黒を極めし初鴉

日常

大石 雄介

山眠るいいやびちびち跳ねている
裸木の撥ね返してるもの賑やか
飛び交っている鶏頭の雌雄かな
点眼の鳩にでもなってみるか
鱒の寄る河口から十キ口正座して
しぐれたら人間が二人になった
びきーびきー鳴いてる春の天の川
日常を刻んで巨蟻螂になった

とは、火の粉が飛び散ること、その影響などが無関係
と思われるところまで広がることをいう。吾亦紅は、
山野に咲く花である。確かにその花は色といい、形状
といい小さな火に見えないこともない。

秋暑し駅から十分なんて嘘

田畑ヒロ子

嘘ばかりの生活であった。「じゅうぶん」と読む余
裕も必要だったのかも知れない。嘘は日常茶飯事であ
った。季語からも嘘の匂いがする。秋になっても暑い
のである。涼しくなって欲しいのである。嘘で固めら
れた人生などといったりもする。嘘には嘘を重ね合わ
せると新しい真実が生まれるのかも知れない。

桜モミヂは風切羽になりさうだ

寶子山京子

紅葉でもあるが桜でもある。紅葉であるがモミヂで
もある。桜モミヂを見上げていると青空が見える。青
空が見える紅葉だからモミヂと表現したのかも知れな
い。風切羽とは上昇力や推進力を与えるためのものだ
である。桜モミヂも上昇したいのかも知れない。上昇さ
せるために存在しているのかも知れない。

知恵袋

足立 和子

梟の森は大きな知恵袋

分け入りてけものの領の草虱

冷やかかや葎にうごくけものの眸

猪の道昼ほの暗く匂ひ濃く

冷やかかにももの道過ぐ風の裏

さわやかや葉先にむすぶ雨の粒

平らかに生きて一文字菊の花

稲ぼっち最終電車過ぎし闇

微熱

小澤 園子

柘榴熟れ人の風味を滴らす

歪む月砲声が地球のどこかで

冬怒涛でんぐり返りしてる波

新茶汲む本音を少しづつ洩らし

夏に入る疑心暗鬼の人の距離

引き算の人生歩み夏に入る

貧しきは男の饒舌花楓

眼帯に微熱冬雲にも微熱

■11月号(652号)「競詠十句」より5句(2)

秋いつぱい

齊藤 桂

魚群探知機に捕まっている鰯雲

加藤かほる

魚群探知機のレーダーに魚の群が映し出される映像は誰しも一度は見たことがあるに違いない。作者は空一面に広がる鰯雲を見ているうちに探知機レーダーと二重写しになって見えてきたのではないだろうか。あまり動きのない鰯雲を「捕まった鰯の群」と捉えたことが楽しい句である。青い空も見える。

万葉集の序文さやかや墨奔る

近藤 久江

万葉集の和歌の前に記されている序文。大友旅人による「梅花の歌三十二首」の序文から「令和」が誕生したことはまだ耳に新しい。作者は普段から書を嗜む人と推察する。序文の内容が爽やかな文章なのだろう。また、「墨奔る」に秋の爽やかな日に気持ちよく筆を運ぶ姿が想像できる。

鴟日和ト音記号のイヤリング

竹下由里子

鴟は秋の天気の良い昼にもよく鳴いている。高鳴きではなく、木の上枝のほうで、それは秋を感じる鳥の

忘れごと

神山つとむ

寒晴れやふと思ひ出す忘れごと

水鳥や浅き夢見し命見し

湯豆腐や妻と二人の風聞く夜

友逝きて町に寒月昔のまま

目薬の一滴いどむ冬の朝

湯たんぽや寓話でさとす祖母の声

踏みて立つ大地の朝の霜柱

嬰笑ひ思はず笑ふ初笑ひ

朝光

あさかげ

高橋久美子

秋の蝶垣の薄日を離れけり

物置に午後の日届く実南天

庭の柚子残り十個のふたつ挽ぐ

溶岩原ラバに噴煙はるか秋薊

払暁の番屋の灯霧流る

朝光の一舟の水脈鴨のみを

山影の湖に広ぐる笹子かな

上げ潮の浦のゆふばえ年用意

声のひとつである。そこにト音記号の形をしたイヤリングをして外出する作者が見える。滅多に見ない形のイヤリングが楽しい気持ちを持つてくる。美術展か音楽会へ出かけるに違いない。

灯明や秋の深さの火先かな

田畑ヒロ子

神仏に供える灯明。作者にとつて灯明をあげ、祈ることは毎日欠かさぬルーティンなのだろう。毎日見ているが故に見過ごしがちではあるが、ある日その火先に秋の深まりを感じた。多分一瞬の空気感、温度感から来る炎の色や形なのだろう。その作者の感覚に拍手を送りたい。

老年やかくも明るく銀杏散る

陌間みどり

大胆な歌いだし「老年や」―私ももう老年だが、それを歌いたくない自分がある。しかし一転、「かくも明るく銀杏散る」と、眼前に銀杏黄葉が飛びこんでくる。老年だからこそその銀杏黄葉の美しさへの気づきかもしれない。また、この銀杏を作者の投影とすれば、これからさらに明るく輝き、散っていけると確信している作者がいる。老年も悪くない。

後後までも『俳句の岸边』

田畑ヒロ子

世に何万という句集、俳論誌があると思うが、本書は類を見ないかも知れない。三十二年間の佃さんの会長時代を含む記録と記憶の総集である。小田原俳句協会の句集への鑑賞はもちろん、背景やその作者の人の柄にまで触れてあるので、読んでいて親しみが一層深まった。中には鬼籍に入られた方もあるので、ご家族の方々も懐かしく思われるのではないだろうか。

協会報五〇〇号達成については「驚くべきことであり、誇るべきことでもある。」と佃さんは述べている。その協会報はその後も休むことなく発行され本号で六五四号となるが、佃さんがこの号数とともに歩まれていることも凄いことである。協会報一号は昭和四十一年六月発行で、そこからの歴史を振り返っての本書の記載によってタイムスリップした感があり、貴重な小田原俳句協会の記録である。

佃さんのお人柄は、何の構えもない自然体であるからファンが多い。「金子兜太と私」が四回に亘っているが、故兜太氏は「熊猫荘俳話」の中で、佃さんの作品を例に挙げ「佃君は感覚の凝縮力が大変ある人だ」と大いに評価している。お互いの信頼があつてのことだと思う。

「俳句の岸边」は小田原俳句協会の後後までの財産である、と改めて思う。

俳句おだわら（12・19×切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（11・26）

久江報

名物の鯛の金目を神の旅

足立 和子

冬の虹古き洋画のスター恋ふ

川本 育子

しぐるるや馴染の猫のしらぬ振り

高橋 小糸

子等の声走らせぬたる時雨かな

山崎 悦子

枯芒起伏うねるや風が鳴る

近藤 久江

◆山北（11・25）

由里子報

飛行機の音なき高さ小春の日

和田恵美子

稲雀とんがり屋根の幼稚園

尾崎 幸子

冬薔薇息ととのえてベルを押す

中山 妙子

熔接の火花が散らす冬初め

尾崎 竹詩

小さめのレトルトカレー日の短か

石田加津子

立冬やゴム入れ替える腕カバー

竹下由里子

◆こよろぎ（12・9）

つとむ報

小春日や日ざしの下の欠伸猫

板谷 雅泉

さきがけて咲く蠟梅の空蒼し

植松テル子

学び舎の窓の明るき黄落期

神山つとむ

◆ 香雨・梅ごち (11・28)

忠山報

日のぬくみ両手で抱へ干蒲団

肥後ちさこ

冬うらら城址と校舎隣り合ふ

関戸わよこ

梢落つる音もひつそり冬はじめ

青山 典子

箒目のきよき境内神の留守

門松 鳳文

冬晴に際立つ白さ天守閣

吉田 百代

冬うらら天守の上に昼の月

吉田 康雄

城門の大き楔の古りて冬

陌間みどり

思はざる芝の弾力冬日和

小澤 純子

玻璃越しに曲輪めぐるも小六月

池田 忠山

◆ 春野 (11・21)

きよ志報

諍ひの因は一言鎌鼬

二見 和江

てのひらに身振ひするや新豆腐

内田知江子

赤い羽根募金振込用紙にて

伊藤はる子

よそ者と言はれて二代冬銀河

尾崎 一夫

菊を焚く色あるごとく匂ひけり

秋山 昇

数珠玉つなぐ父母あるやうに

瀬戸 悠

長き夜は亡き寂聴の恋談議

長谷川きよ志

◆ 沈丁 (12・4)

寶子山報

枯野行く男一人のふところ手

中野 文子

独り占め枯野の宿の大落暉

若村 京子

片意地を張れば孤独よ枯野道

柳澤ミサ子

逃れても逃れても夢枯野かな

田中 恵一

遠山に希望の星よ赤を見る

河本 純子

冬蜂に月が欠けると教えるも

瀧本 敦子

枯野道歩幅大きく歩き出す

勝木 澄子

枯野行くものの歩みの 其其

菅野 英余

枯野原犬追いかけて風になる

高井 幸子

鳥百羽百の影曳く枯野原

片野 節子

バームクーヘンのやうな枯野が一枚

寶子山京子

手は出さず踏み出しもせず雪だるま

かほる報 村上 龍山

小春日やピアスきらりと塗装工

加藤 富江

やわらかに飯噴く匂い花八つ手

豊田 幸枝

身を立てる特技なくとも文化の日

市川めぐみ

一服の小話はすむ小春かな

斎藤 静

回るほど姿勢正すや木の実独楽

加藤 健治

キャンパスとなる丹沢湖小鳥来る

飯田 愛

冬来るアイヌの民のイヨマンテ

小瀬村信子

入賞の知らせが届く小春の日

加藤れい子

深秋の山はパレット見て飽かず

加藤かほる

◆ 青梅 (12・8)

幸子報

柚子風呂に老の願いを託しけり

大塚 行人

大白菜芯の黄色の甘さかな

湯本とし子

孫自慢病氣じまんの日向ほこ

神野美代子

セロリの香都会の風に馴染みけり

加藤まり子

行秋の夕日を送る畑かな

久保寺トミ子

洛北や冬深くして語る宿

田渕 令子

初冬の水音水を洗ひをり

田中 幸子

◆おほゐ(12・8)

昌男報

実千両廊下で話す嫁三人

石井きよ子

幸せは日々の生活に鍋囲む

小野 菊土

人去りて山は静かに初時雨

香川 花子

子供より親が着飾る七五三

風間 秀泰

喜怒哀楽思い返して毛糸編む

加藤 春江

富士の峰白衣重ねて師走かな

坂入清四郎

時雨来て音移りゆく谷戸の村

瀬戸とみ子

復興の波寄せ返る師走かな

高橋みどり

あれこれを延ばして焦る師走かな

中津川春江

風と来て師走の街の音となる

中根登美子

夜を通し繕うははの影師走

中村 昌男

茶の花や蕊は茶筌となりて咲き

廣田 悦子

日の匂い今日も幸せ干し布団

二上 光子

寒月の照らすく籠駄句一駄

横塚 昌平

コンテナ船行き交う無言師走かな

石井千代子

◆鷹(12・4)

十五報

小春日やマルシエに並ぶキッチンカー

青木 孝子

秋の球根植ふし安らぎ夜雨さく

西賀 久實

小春日や法話の始め笑はせて

佐宗 欣二

望遠鏡夜空に向ける湯ざめかな

須田 晴美

買物メモ家に忘るる冬うらら

中田 笑子

珈琲店の被爆ピアノや冬桜

百川 秀子

水槽の蛙冬眠われ遊子

山崎美知子

色変えぬ松や花押の座り良く

庄司 下載

炭納屋や北山の杉鎮もれる

瀬戸 りん

差し潮の浦の夕映年用意

高橋久美子

野ねずみのちよると藁塚日和かな

中山智津子

初時雨欠礼はがき投函す

齊藤 桂

山門の大榎木菟の眠りをり

芹澤 常子

ポインセチア葉に恋の一行詩

畠 梅乃

衣食足り分相応や石路の花

山口安規子

朝顔の実の部屋みつ種むつつ

大木 敬子

響動もせるパイプオルガン裘

大島美恵子

冬ざれや雲の触れゆく電波塔

北崎 修

ハーケンの残響冴ゆる一の倉

田下 昌人

余生とはつぎはぎだらけ日向ぼこ

宮崎 悦女

花八つ手平がな多き母の文

中根 和子

◆実のり(12・16)

たか志報

いつもの子あいさつして今朝の冬

加藤 幾代

紅葉燃ゆ九十九才寂聴逝く

岩本ひさみ

ひとり居の月日は速し実南天

高橋 正子

白障子に機織るつるの影絵かな

杉本 久子

寒紅や買ったばかりの靴履いて

守屋 まち

銀輪のひかりを回す年の暮

木村 幸枝

髪を梳く合せ鏡に冬の虹

米山 翠

冬の川重機剥き出す鉄の爪

新井たか志

屋根の上雀遊ぶや冬至梅

來田 新子

◆草むら(12・19)

重満報

古書店の女主の着ぶくれて

大沢 年子

クリスマスケーキは小さくなりにけり

石井 秀稀

さびしさとうれしさ隣る去年今年

片野 秋子

老いと云うたしかなあかし冬の朝

井上 和子

注連を緬ふ納屋にラジオの大音響

小林 環

白昼の百虫の烙印であった

佃 悦夫

西の窓冬夕焼やパイを焼く

下平 美子

寒雁行 遅れ一羽の行く末が

佐々木重満

青空に貼りし雪富士返信来

杉崎 せつ

◆零(12・16)

史郎報

マフラーを二重に巻きて出勤す

関根 琉子

大根の穴の数だけある戦禍

木村 和彦

茶屋に見る登山記録や軒氷柱

鳥海 壮六

この妻と共に老いたし大根干す

青木たけを

蠟燭の火のよく匂ふ霜夜かな

古屋 徳男

ママチャリに白息三つ転ぶなよ

伊藤 道郎

内緒事蔵するやうに聖夜の灯

村場 十五

大根はなんにでも合ううまいもの

井上 良子

◆たけのこ(12・15)

悦女報

大根好きさて豚汁を啜ろうか

川合 昌子

屈み見てさらに屈みて藪柑子

小宮 早苗

息白し工事現場の誘導員

佐藤 正子

夕茜包み込みたる銀杏黄葉

久津間百合子

冬銀河抱く一樹となりにけり

中村 裕子

大涌谷温泉卵富士の雪

徳田 公子

登り窯次の火入れは年越しと

野川木一路

ドレミレドメロディーにのせ焼芋屋

三木 泰子

寂聴の天の座として寒昂

岡本 史郎

◆無所属

食パンの四隅に木枯ふいている
赤ちゃんの体温もらう寒さかな
冬の朝ゆつくり沈む削り節
幽雅なり皇帝ダリア空に映え
北向きの直哉の書斎小鳥来る
山波をふはりと泳ぐ神の旅
落葉掃き五指のしびれやうらめしや
大判焼冬日もろとも割りにけり
遠吠えの絶対音感月青し
朝鴉やわが血しずかに採られぬて
立冬や娑婆の戯言ふたつみつ
花野ならきのうはぼくの部屋にいた
あいさつは「素朴な人生を」花八ッ手
脳震盪起こした蟬が落ちている
完走に一礼をして初マラソン
無印良品のハンガーインフルエンザかな
枯野人燃えて宇宙に行つたきり
盗難の蛇口あらら神の留守
啼き交はし翅打つ恋の大白鳥
銀行に鳥は止まらず寒波来る

小林永以子
蓑宮 わか
一ノ瀬茂代
鈴木久美子
出澤 洋子
北村 文江
岩楯恵津子
小澤 園子
田畑ヒロ子
山田 照子
穂坂志げる
大石 雄介
大石 和子
小島ノブヨシ
山口 千代
瀬戸 正洋
岡田 典代
杉山あけみ
木村美千代
須田 聡子

理事会だより (12・9)

- 一、梅まつり俳句大会第二部変更要否は1月理事会にて決定する。役割分担を検討し1月の理事会にペーパーで配布する。なお第二部の選句を時間短縮のため今回4句にすることを決定。
- 二、第75回小田原桜まつり俳句大会の兼題を「桜又は花」「雲雀」(いずれも傍題可)、投句締切を4年2月25日(金)、選者特選賞選者を佃名誉会長、新井顧問、池田会長、グループ(草むら・零・鷹)に決定。
- 三、次期改選期を迎える会長につき、11月11日の指名委員会において池田会長の留任を全員一致で要請していたところ、12月9日の指名委員会に池田会長が出席の上一期限りを条件に承諾されたことが長谷川指名委員会委員長より報告され、本日の理事会として満場一致で承認された。今後は会則に基づき総会で正式に決定することになる。
- 四、立春句会のコロナ状況での変更要否は1月理事会にて決定する。
- 五、藤田湘子記念小田原俳句大会につき村場実行委員会副委員長より投句御礼と大会への協力依頼あり。

古屋 徳男

鐘の音の夕べや冬至南瓜切る
ほろ酔の耳より醒めし霜夜かな
ちぎり飛ぶ夕雲千鳥こゑもなし
屠蘇受くや磨き上げたる床柱
若菜摘風くる川の光りをり

高橋みどり

寂しむや黙って離るる木の葉髪
香に浸り何時か無になる柚子湯かな
冬日和ひかり返すや酒匂川
裸木となりて無口の公孫樹かな
冬日向下手の横好きミシン踏む

小瀬村信子

賑やかに大売り出しの旗ならぶ
家々で静かに祝うクリスマス
大掃除すみて家族は笑顔なり
神仏に心をこめて供え餅

片野 秋子

自転車に事足る暮らし牡丹の芽
葉牡丹に日の差す時間下午の庭
はんこ屋に我名を探す納税期
桃の日や正客を待つ十畳間
流れ藻に寄付く魚や涅槃西風

俳句おだわら鑑賞

瀬戸 りん

(令和3年10月号より)

兄はまだ二十歳のままぞ墓洗ふ 門松 鳳文

病没か事故死、敗戦近くの戦死か、二十歳で夭折した兄。「まだ」と言っている所を見ると、作者はとうに兄の年齢を過ぎ、作者の子供か孫も兄の年齢を過ぎていたのかもしれない。長く人生を歩んだ自分に対し、死者の時は止まっている。墓を洗いながら、作者は兄と対話し、兄のまなざしを感じているに違いない。そしてまた噛み締めるのだ。断ち切られた兄にあるはずだった時間を、自分の過ごしてきた日々を。胸一杯の切なさ、やるせなさと共に。

ひぐらしや父似の足の指を揉む 竹下由里子

人は父母から思わぬものを受け継ぐ。鼻筋、歯並び、手の指の形……。しかし足指が似ているとはあまり聞かない。足指を見る機会があまりないからだ。親指より人差し指や中指が長いと、親より出世するともいわれるが……。作者は父譲りの足指を揉んでいる。手足の指にはツボが沢山あるという。父の足指を何度も揉んだ思い出があるのかもしれない。その時に指の形で、父との思わぬつながりを感じたのだ。ひぐらしが、素足の季節の終わりを告げている。

第75回小田原桜まつり俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「桜又は花」「雲雀」（いずれも傍題可）

各一句一組

未発表作品に限る

締切 令和四年二月二十五日（金）必着

整理費 一組に付き千円（句稿に同封、何組でも可）

投句先 〒258・0019 足柄上郡大井町金子一四一

小野菊土苑（電話〇四六五一八三一〇八八〇）

*作品は原稿どおり印刷します。

選者 協会役員及び各地有力作家（投句者に限る）

賞 県知事賞以下二十位まで 選者特選賞六人

第二部 俳句大会

日時 令和四年四月三日（日）

会場 小田原市民交流センター（UMECO）

受付 十二時 投句締切…十三時 開会…十三時

整理費 五百円（呈飲料）

席題 春季雑詠二句 総互選

賞 市長賞以下五十位まで 参加賞

（主催）小田原市観光協会（主管）小田原俳句協会

（後援）各地俳句協会

*会場は現在のところ飲食可能ですがなるべく各自、食事を済ませてご参集ください。マスク着用など感染症防止対策は継続します。

小田原文化の日俳句大会報告（追加）

○「俳句の岸辺」刊行を承け、池田会長より佃名誉会長へお祝いの言葉と共に贈呈され、佃氏より御礼の挨拶があった。

○令和二年、三年の寿齢者表彰を行った。（令和二年度文化祭俳句大会がコロナで中止となったため今回二年分として本大会投句ありの59名を表彰）

理事会日程（各月第二木曜日） 2 / 10 3 / 10

立春句会 2月4日（金）

梅まつり俳句大会 2月6日（日）

◆お詫びして訂正します◆（十二月号）

5頁グループ名

（誤）春雨・梅ごち（10・24）
（正）春雨・梅ごち（10・24）